

# Institutional Research 論の開講と実績について

大石 哲也、森 雅生（東京工業大学）

## 1. はじめに

日本の大学では18歳人口の減少などに起因して経営環境が大きく変化している。このような状況下において各々の大学ではIR（Institutional Research）の需要が高まっている。多くの大学ではIRの部署が作られるもののIRを担当する者がいない、担当する者がいても何をして良いかわからない、などIRを取り巻く人材育成が必要とされるようになった。このような背景から九州大学では2013年度から大学院の科目として「IR人材育成カリキュラム」を開始した[1][2]。またこのカリキュラムの短縮版として「大学IR集中講習会」を開催し、現在に至るまで定期的に開催している[3]。

近年、文部科学省が実施している私立大学等改革総合支援事業[4]においてIRに関する項目が追加されるなど、ますますIRの需要が高まっている。平成30年度の私立大学等改革総合支援事業にIRに関する高等教育プログラムを履修した者がいることが項目として追加された。

このような状況を考慮して2019年度から東京工業大学の社会人アカデミー[5]という社会人向けの講座やプログラムを提供する仕組みを利用して「Institutional Research 論」を開講することになった。本稿では「Institutional Research 論」の前身にあたる「IR人材育成カリキュラム」および「大学IR集中講習会」について説明した後に「Institutional Research 論」の概要を説明する。また「Institutional Research 論」の実績としてアンケートの内容とその結果について述べ、今後の展開を述べる。

## 2. IR人材育成カリキュラムの概要

九州大学においてIRや大学評価の専門性や継続性を確保するために人材育成が必要であるという判断から「IR人材育成カリキュラム」が設計され[6]、2013年度に大学院共通教育科目として5科目10単位の講義を開催した。このカリキュラムはHoward-McLaughlinが指摘した情報支援サイクル[7]（図1）を踏まえて策定された。

カリキュラムの構成および内容は表1に示すとおりである。情報支援サイクルに沿ってそれぞれの活動と表1における科目の対応を図2に示す。

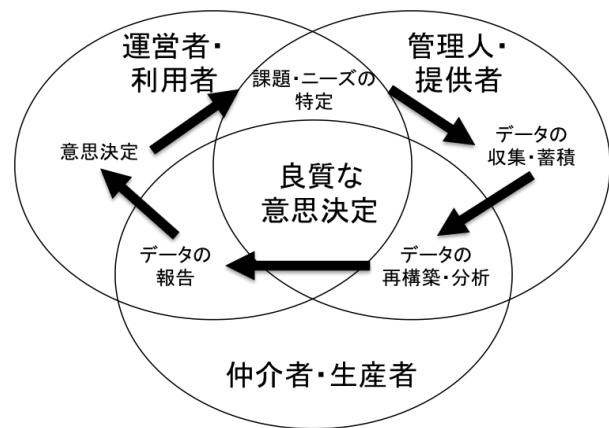


図1 Howard-McLaughlinの情報支援サイクル

表1 カリキュラムの構成・内容

科目名	単位数	目的
(1) 大学経営と IR	2	・ 大学経営における IR の意義 ・ IR のニーズの基礎にある内外環境・ガバナンス・課題の理解
(2) IR データ収集・管理論	2	・ 大学におけるデータ収集・管理技能の習得
(3) IR データ分析論	2	・ 大学における意思決定に必要なデータ分析技能の習得
(4) 大学評価と IR	2	・ IR 業務のうち、特にニーズが具体的な評価業務の基礎技能を習得
(5) IR インターンシップ	2	・ 基礎知識の実務への応用

活動	IR 担当者							執行部
	課題・ニーズの特定	データの収集・蓄積	データの再構築・分析	データの報告				
				IR の機能様式				
				情報管理	政策分析	情報発信	研究活動	意思決定への活用
情報支援サイクルの流れ 								
科目	(5) IR インターンシップ							
	(1) 大学経営と IR	(2) IR データ収集・管理論	(3) IR データ分析論	(2) IR データ収集・管理論	(1) 大学経営と IR	(4) 大学評価と IR	(3) IR データ分析論	

図2 情報支援サイクルおよび機能様式とカリキュラム

IR カリキュラムの講義を受講するためには受講者は九州大学まで出向く必要があり、遠方の方々受講するのは困難であった。そこでこのカリキュラムの短縮版として「大学 IR 集中講習会」を実施することとなった。第1回目を京都で実施して以降現在に至るまでに合計で8回実施した（表2）。第4回を除く全ての回で事前に用意した座席が申し込み開始から早々に満席となり、IR に関する注目度が高かったことがわかる。

第7回までは単日の開催で参加費は無料であったが、第8回は2日間の開催で参加費も徴収した。第8回に関しては修了証を発行することを事前に告知していたこともあり、他の回と比較しても早々に満席になった。これは参加者の IR に対する興味や関心が高かったことも要因の1つであると思われるが、それ以上に私立大学等改革総合支援事業[4]において「1 IR の企画や実施方法等に関する専門的な高等教育プログラムを履修した者を担当教職員に配置している。」や「21 には該当しないが、IR 担当教職員に IR の企画や実施方法等に関する研修を定期的に受講させている。」という基準が設けられたことによる各私立大学における戦略的な判断による集中講習会への参加が大きな要因であったと思われる。

表2 大学 IR 集中講習会開催実績

回	開催日・会場	会場	参加人数（人）
1	2014年9月25日	キャンパスプラザ京都	50
2	2014年9月29日	東京国際フォーラム	50
3	2015年3月4日	キャンパスプラザ京都	30
4	2015年3月16日	北海道大学	30
5	2015年7月15日	岡山コンベンションセンター	40
6	2016年1月21日	キャンパスプラザ京都	40
7	2018年1月30日	東京国際フォーラム	69
8	2019年2月27・28日	東京国際フォーラム	48

表3 Institutional Research 論 開講スケジュール

回	第1期	第2期	13:00-14:30	14:40-16:10
1	5月11日 (土)	8月31日 (土)	課題意識の言語化・大学経営と IR ワークショップ（森・大石）	
2	5月25日 (土)	9月14日 (土)	データベース論 I・II（大石）	
3	6月8日 (土)	9月28日 (土)	データウェアハウス論（森）	IR マネジメント I「情報 管理」（森）
4	6月22日 (土)	10月12日 (土)	教育データ分析基礎（大石）	研究データ分析基礎 （森）
5	7月6日 (土)	10月26日 (土)	教育 IR 事例 I「中退予防」 （白鳥）	教育 IR 事例 II「学生調 査」（杉原）
6	7月20日 (土)	11月9日 (土)	IR とネットワークセキュリティ （大石）	IR マネジメント I「報告 技術と人材育成」（森）
7	8月3日 (土)	11月23日 (祝)	大学評価と IR （高田）	大学経営と IR （森）
8	8月17日 (土)	12月7日 (土)	受講生の抱える課題のための WS I・II （森・大石）	

### 3. Institutional Research 論の概要

九州大学での IR カリキュラムや大学 IR 集中講習会での実績と今後の IR の重要性や必要性を考慮した上で、東京工業大学情報活用 IR 室を実施主体として社会人アカデミーの仕組みを利用して2019年度に「Institutional Research 論」を開講することとなった。大学 IR は教学分野で遂行され、近年、多くの大学において大学の運営に関わる IR も求められるようになっており、本講座において、IR 実務者のスキルアップのために IR の背景、基礎、応用を最先端の IR 実務者による講義も含めた内容から学ぶことを目的とした。また本講座は税込で 98,000 円の受講料を徴収し、出席状況、課題の提出状況が基準を満たした修了者に対して、社会人アカデミー長名の「修了証書」を交付することとした。

**2019年度 IR論・第1期 アンケートご協力をお願い**

ご受講いただき、誠にありがとうございます。東京工業大学社会人アカデミーでは、今後も講義内容の充実を図るため検討を重ねております。本アンケートは講座の検討以外の目的では使用いたしません。お手数をおかけしますが、皆様よりご意見・ご要望等を調査できれば幸いです（アンケートは成績と関わりありません）。

<b>1. ご自身について、あてはまるものをお知らせください。</b>	
年齢	10代/20代/30代/40代/50代/60代/70代～
受講目的	業務との関連/学識を深める/その他：
上で「業務との関連」を選択された方は【業種】【職種】もお知らせください。	【業種】 大学/公的機関/その他：
	【職種】 経営者/管理職/専門職/研究者/その他：
<b>2. 講習全体について、1～5 よりあてはまるもの及びその理由をお知らせください。</b>	
満足度	満足でない←-----→満足 1 2 3 4 5
理由	
業務/学識を深めることに関して	役立たない←-----→役立つ 1 2 3 4 5
理由	
<b>3. 受講料の価格について、1～5 よりあてはまるもの及びその理由をお知らせください。</b>	
満足度	満足でない←-----→満足 1 2 3 4 5
理由	
<b>4. その他、ご意見ご感想、ご希望等お気づきの点などがありましたら、ご自由にご記入ください。</b>	

記載いただいた内容は、社会人アカデミーウェブサイトでご紹介させていただく場合があります。掲載を希望されない場合は、右の□欄にチェックをお願いします。  
掲載不可

図3 受講者への事後アンケート

本講座は1コマ90分の15コマで構成した（表3）。学外講師も含め5名の講師が講義を担当した。第1回の「課題意識の言語化・大学経営とIRワークショップ」で導入、第8回の「受講生の抱える課題のためのWSI・II」でまとめおよび解決する構成とし、第2回から第7回は以下のようにHoward-McLaughlinの情報支援サイクルには当てはまる。

- データの収集・蓄積：「データベース論I・II」、「データウェアハウス論」、「IRマネジメントI「情報管理」」、「IRとネットワークセキュリティ」
- データの再構築・分析：「教育データ分析基礎」、「研究データ分析基礎」、「教育IR事例I「中退予防」」、「教育IR事例II「学生調査」
- データの報告：「IRマネジメントII「報告技術と人材育成」」、「大学評価とIR」
- 意思決定および課題・ニーズの特定：「大学経営とIR」

#### 4. Institutional Research 論の実績

本講座の受講者は第1期に12名、第2期に11名であった。執筆時、第1期はすでに終了しており図3のような受講者への事後アンケートを実施した。このアンケートは「講座の検討以外の目的では使用しない」ことを宣言しているが、本稿ではこの目的に合致する。本節では個人情報をも特定されない形でアンケートの結果を分析する。第2期は執筆時に開講中でアンケート未実施のため本稿には掲載しない。

図4に示すとおり講義全体の満足度は概ね良好であったことがわかる。自由記述で多くの人が「体系的な学び」について言及しており、これが高い満足度につながったと思われる。

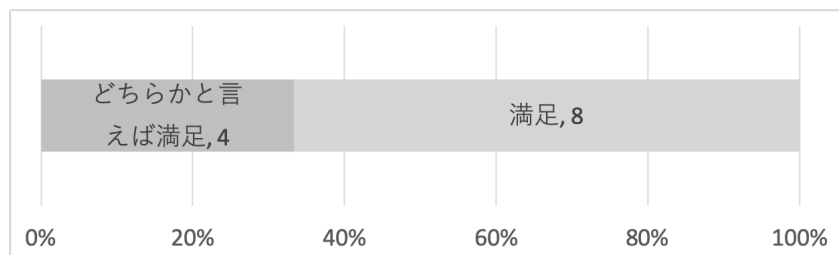


図4 講義全体の満足度

図5より業務や学識を深めることに役立つと感じた受講者も多かったことがわかる。他大学のIR実務者との交流があったことがこの結果につながったと推測される。

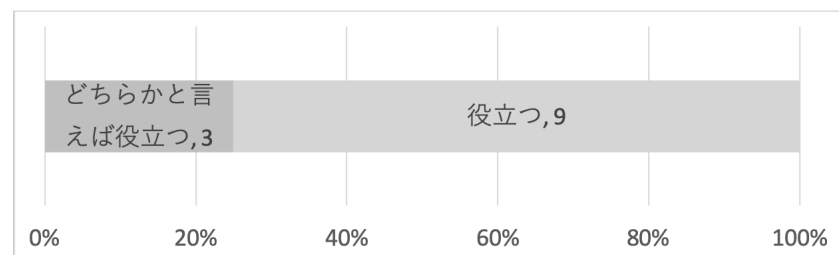


図5 業務や学識を深めることに役立つか

図6より受講料に関する不満は少なかったと思われる。本講座は98,000円の受講料を徴収したが、「内容が濃い」という意見もあり高価であるとは感じなかったと思われる。

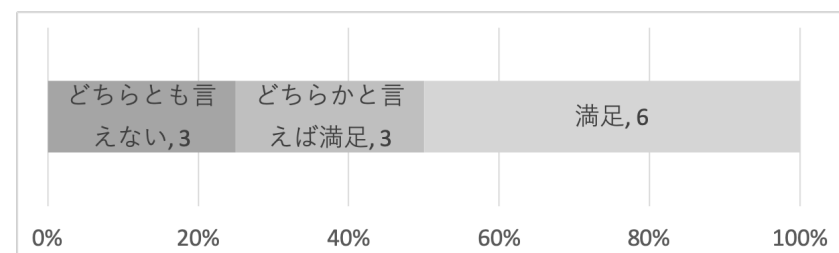


図6 受講料の満足度

## 5. 今後の展開

2019年度に開講した東京工業大学における Institutional Research 論は九州大学での IR 人材育成カリキュラムや大学 IR 集中講習会での重要性や必要性を考慮して、IR 実務者のスキルアップのために IR の背景、基礎、応用を学ぶことを目的にしていた。アンケートの結果、概ね受講者の満足度は高かったことがわかった。体系的に IR について学ぶことができたことが受講者の満足度につながったと思われる。一方で課題も残った。データベース論のようにすでにスキルを身につけている人の立場では簡単で不要に感じたり、逆に今まで馴染みがなかった人にとっては新鮮に感じたりするような科目が存在した。また、PC等を用いた実習の時間を設けることができなかつたため、この点の改善は必要である。難易度を変えた定期的な開催も求められており、今後は実施方法について検討を重ねる必要がある。

### 【参考文献】

- [1] 大石哲也, 高田英一, 森雅生 (2015), IR 人材育成カリキュラムの現状と課題-九州大学における取組の検証を中心に-, 日本教育情報学会第 31 回年会論文集, 31, pp.182-185
- [2] Tetsuya Oishi, Masao Mori, Eiichi Takata (2016), Curriculum of Human Resource Development for Institutional Research in Japan, the Fourteenth Annual Hawaii International Conference on Education.
- [3] 大石 哲也, 劉 沙紀, 小柏 香穂理, 関 隆宏, 高田 英一, 森 雅生 (2019), 世界のレピュテーション・マネジメントの現状と日本における IR 担当者の意識, 日本教育情報学会第 35 回年会論文集, 35, pp.120-123
- [4] 平成 30 年度 私立大学等改革総合支援事業調査票,  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/02/26/1413852\\_09.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/02/26/1413852_09.pdf), 2019年9月30日閲覧
- [5] 社会人アカデミー, <https://www.academy.titech.ac.jp>, 2019年9月30日閲覧
- [6] 高田英一, 森雅生 (2013), 我が国における「IR 人材」の育成プログラムのあり方について, 大学マネジメント, 9(3), pp.14-21
- [7] Gerald W. McLaughlin & Richard D. Howard (2004), People, Processes, and Managing Data (second edition), Association for Institutional Research